慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和戦前期における第三党に関する一考察：「革新政党」国民同盟を中心に
Sub Title	The rise and fall of Kokumin-Doumei : the frustrated endeavor to balance conservative and progressive parties in transitional period
Author	松枝, 大貴(Matsue, Daiki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学大学院法学研究科論文集 (Proceedings of Keio University Graduate School of Law Studies in Law and Politics). No.57 (2017.) ,p.235- 281
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069591-00000057-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昭和戦前期における第三党に関する一考察

――「革新政党」国民同盟を中心に――

松枝大貴

はじめに
一　協力内閣運動と国民同盟
㈠　協力内閣運動における安達謙蔵と中野正剛
㈡　「革新政党」国民同盟の結成
二　国民同盟の思想・人脈・地盤
㈠　所属政治家の特徴
㈡　党幹部の思想と人脈
㈢　党内各グループの人脈と地盤
三　キャスティング・ヴォート掌握の可能性
㈠　「革新」と「政党」の摩擦
㈡　社会大衆党との比較
おわりに

はじめに

「憲政の常道」の語に象徴される昭和初頭の議会政治は、周知の通り立憲政友会・立憲民政党（以下、政友会・民政党）の二大政党がその担い手であった。内閣の首班奏薦の権を持つ元老西園寺公望の意向のもと、両党は交互に政権を担当、昭和三年には第一回男子普通選挙も実施され、「デモクラシー」の全盛ともいえる状況が現出したのである。二大政党はそれぞれの政策を打ち出し、国民に訴え、そして実行していったが、一方で、選挙における買収や干渉、議会における醜聞の暴露等、両党が互いに政権を目指す過程で繰り広げる政争は激甚となった。大正期に端を発する経済不況と社会主義思想の拡大、中国ナショナリズムの高揚と国際協調外交の摩擦といった内外情勢の変動を背景に、政権運営の失策も重なった二大（既成）政党は国民の支持を失っていったのである。

既成政党不信が広がる中、昭和六年、満洲事変・十月事件が勃発する。軍部の台頭に動揺した政界では、若槻礼次郎民政党内閣の内相安達謙蔵と彼を総帥に担ぐ民政党党人派代議士らが、議会勢力が結束して軍部を抑制すべく政友会との協力内閣を構想、その実現に向けて運動を開始した。しかし、この協力内閣運動は民政党官僚派の反対と若槻首相の翻意により失敗する。閣内不一致を惹き起こした若槻内閣は総辞職、安達らは民政党を脱党し、翌年国民同盟を結成するに至った。

国民同盟は、三十余名で発足したのち、やがて脱党・分裂により先細りし、昭和一五年大政翼賛会の発足に伴い解党に至ったため、従前より――当時の政界はもとより、後年の研究においても――小政党として扱われざるを得ない存在であった。唯一国民同盟を中心的に扱った伊藤隆氏の「国民同盟の結成――安達謙蔵」[1]は、同党の「一つの側面は『安達党』的なもの」としつつ、「『なかば既成政党、なかば革新派』が国民同盟の性格」であると述べるなど、示

唆に富む視点を提示しているものの、内容は通史的、概説的で実証性も乏しい。また、伊藤氏と同様の視座で、永井和氏「東方会の成立」[2]や有馬学氏「反復の構造」[3]が、中野正剛を中心に国民同盟の掲げた理念、政策など、その「革新」的な側面に言及しているが、主題は中野が昭和一〇年に結成する東方会であり、国民同盟はその前段として述べるにとどまっている。なお、伊藤氏は「革新」という語を「明治維新以来の体制全体を……『改造』し、『革命』し、『革新』していこうという方向性をもった政治動向」[4]と定義し、議会外における急進的な社会主義思想を持つ人物たちを特に「革新」派と呼称している。本論文ではあくまで議会内の政党政治家を対象とするため、「明治維新以来の体制全体」ではなく、「政党政治」の変革を志向するという、より限定した意味で「革新」という語を使用していく。

本論文では、国民同盟が二大政党時代の政党政治家たちによって結成された第三党であるとともに、極東モンロー主義の確立・統制経済・内閣制度廃止等の「革新」的な綱領を掲げた「政党」であるという点にも着目し、政党政治から戦時体制への過渡期の政治状況の一面を映し出す存在と位置づけ、論じていく。「革新政党」国民同盟に所属した政治家らの経歴・思想・人脈・地盤、ならびに党の組織・運営の実態とイメージを検証することによって、昭和戦前期の議会で「第三極」形成を模索した動きを明らかにするとともに、それが有権者の支持を得られず失敗した要因を、同時期の他政党、議会の様相についても適宜言及しながら考察する。

一　協力内閣運動と国民同盟

㈠　協力内閣運動における安達謙蔵と中野正剛

本論の始点として、満洲事変直後の昭和六年一〇月末より展開され、国民同盟結成の契機となった協力内閣運動に

ついて確認しておきたい。協力内閣運動については先行研究が山積しているが、ここでは議論の焦点を明確にするため、満洲事変処理をめぐる陸軍との関係について論じられたものは除き、純然たる内政問題、より具体的に言えば、若槻内閣の後継内閣の形態をめぐる政局史を論じた坂野潤治氏「「憲政常道」と「協力内閣」」[5]、小山俊樹氏「『協力内閣』構想と元老西園寺公望」[6]と、民政党の党内構造および運動の主導者らの政体構想を軸に論じた井上敬介氏「中野正剛と党外人」[7]を参照する。

まず、坂野氏は、当時の政界中枢において後継内閣の候補として元老西園寺の「憲政常道」（政友会単独内閣）、牧野伸顕・山本権兵衛・財部彪ら薩派リベラルの「協力内閣」（「重臣」による「挙国一致」内閣）、宇垣一成の「協力内閣」（「政民合同」の宇垣新党による「一国一党」制）の三つがあったと論じた。こうした「憲政常道」と「協力内閣」の対立構図や薩派勢力を重視する姿勢については、『牧野伸顕日記』、『河井弥八日記』等の新史料公開後、小山氏によって否定されるが、坂野氏が指摘した以下の三点については事実として踏まえておきたい。すなわち、安達が財部・牧野を往訪し協力を要請していること（財部・牧野両日記による）、その安達ら「政民協力」の運動そのものに宇垣は無関係であったこと[8]、そして結果的に西園寺が選択した「大正デモクラシー」の延長路線（「憲政常道」）により組閣された犬養毅政友会単独内閣は、西園寺が最も懸念していた「ファッショ」「右翼」と言われる荒木貞夫派・平沼騏一郎派を抱え込むという逆説を生んだこと、の三点である。

次に、小山氏が指摘しているように、昭和六年一一月末に若槻内閣の続投がほぼ確定した際には、安達も「こゝ暫らくの推移を見」[9]ると静観の構えを示していた[10]。安達は一二月初頭、西園寺にも「とにかく連立といつても何といつても、総理の若槻が動かない内は、何事もできません。まあこれで一つこのまゝ押して行きます」と言明している[11]。

そして井上氏は、協力内閣運動の主導者として安達ではなく中野を重視した。中野は民政党において伊沢多喜男（内務官僚・貴族院議員）・幣原喜重郎（外務官僚）・井上準之助（元日銀総裁・貴族院議員）ら官僚的な「党外人」に批判的

でその排除を企図していたため、「安達の意思を無視するほど急進化し」[12]ていたという。第二章で後述するように、中野は「大正デモクラシー」期以来、反藩閥・反官僚の姿勢を鮮明にし、民政党の政綱を起草した際には「議会中心主義」を掲げていた。協力内閣運動においては中野は自ら政友会に「いろいろ連立運動をしにやつて来」て議会勢力の結集に動いていたが、「陸軍の荒木中将の所に日参をしてゐる、といふ噂さへ」流れていた。[13]ここでも坂野氏が指摘したような、「大正デモクラシー」を追求した結果「右翼」と接近したことが確認されるのである。

これらの研究により、民政党党人派、協力内閣運動、国民同盟と、いずれも中心人物として政治行動を共にした安達と中野であるが、両者にはその姿勢に相違があったことが窺われる。すなわち、明治憲法体制の権力構造を踏まえ牧野や西園寺らの協力と同意を得つつ穏健に議会勢力への政権移譲を模索した安達と、民政党の政綱に掲げた「議会中心主義」を追求し党内の官僚グループとその背後にある明治憲法体制内の既存勢力を凌駕しようとした中野の相違である。

(二)「革新政党」国民同盟の結成

続いて本節では、協力内閣運動を経て国民同盟結成に至る過程を時系列で辿り、国民同盟に関する議論の材料となる基本事項を提示したい。

昭和六年一二月一一日、協力内閣運動をめぐって閣内不一致を生じた第二次若槻礼次郎内閣が総辞職すると、直後の一四日、安達謙蔵・中野正剛・富田幸次郎・杉浦武雄・田中養達・三浦虎雄・由谷義治・風見章・岡野龍一・簡牛凡夫の一〇名は民政党を脱党した。年が明けた昭和七年一月一一日には中野・杉浦・田中・由谷・簡牛・風見が中野邸で会合し倶楽部組織を協議しているが、二月二〇日に行われた第一七回衆議院議員総選挙で彼らは無所属で立候補する（杉浦・田中・三浦・岡野・簡牛は落選）。一方、民政党内は党人派代議士らの去就や安達の復党をめぐって混乱状態

となり、六月下旬以降、脱党者が続出する事態となる。六月二三日に山道襄一・古屋慶隆・小池仁郎が脱党したことを皮切りに、伊豆富人・深水清（二四日）、加藤鯛一（二七日）、佐藤啓・佐藤理吉（二八日）、野中徹也・戸田由美・鷲沢与四二・福田虎亀（七月一日）、井上剛一・後藤亮一（一三日）、菊池良一（一四日、以下略）と続いた。この間安達・中野らは七月一日に国策研究倶楽部を設置し民政党脱党者を糾合、また同月二五日解消した革新党の代議士を迎えると、二八日に第一回懇談会を開いた。八月八日、立党準備会にて党名を国民同盟と決定し二三日より第六三回帝国議会に臨み、閉会後の九月一二日、国民同盟総会にて宣言・綱領を決定、一二月二二日に国民同盟結成大会を挙行するに至った。日比谷公会堂で行われた結盟式には、党員四千名が参集したと報じられている。[14]

国民同盟の宣言・綱領を次に掲げる。[15]

宣言

国民同盟は日本建国の精神を拡充し、外に国際正義を検討して屈辱なき恒久平和の基準を定め、内に統制経済を確立して、搾取なき正義社会を建設するを以て目的とす。乃ち日本国家は国際的非条理により発展を阻害せらるるなく、日本国民は社会的不正義によりて生活を脅威せらるるなし。国家の富強は常に世界の進運に寄与し、社会の繁栄は断じて一人の無辜の民を飢えしむるを許さず、これ実に我等の信条なり。

国民同盟はこの大業を成さんがため、広く天下に訴えて同志を糾合し、正義廉恥の交を固くして強力組織を拡大し、国民政治を徹底して万難の衝に当らんとす。敢えて大衆の協力を求む。

綱領

一、立国の精神を拡充し、国際正義の再建を期す。

一、統制経済を確立し、大衆生活の保障を期す。
一、政界の積弊を打破し、国民政治の徹底を期す。

「外に国際正義」すなわち他国に阻害されない日本の「発展」を、「内に統制経済を確立」し「搾取なき正義社会」の建設を表明、その方策として「強力組織」による「国民政治」の実現を唱え、「大衆の協力を求」めている。それぞれ外交・経済・行政に関する方針であるが、安達総裁演説により具体的に見ていくと、まず外交面で「国際諸条約を再吟味して、……極東モンロー主義の宣揚と、日満経済ブロックの完成とを基調とし」、「満洲国出現の実在を肯定すると共に、……連盟規約が米国のモンロー主義を認め、不戦条約が英国をして、米国のモンロー主義に均霑せしむるに拘らず、列国が九ヵ国条約を曲解して、満洲国の自然発生的現実を否認し、之に対する日本の合意的進出を阻止せんとするが如きは、世界の最高良心に訴えて、其の不条理を矯正せねばなりません」と満洲国の承認とそれによる日満のブロック化を主張、英米の論理で動く国際政治に異を唱えている。これは従来外務省によって進められた英米との協調外交に対する「革新」の表明と言えよう。経済面では「統制経済は、公益を目的とする国家主義の発動であり……特権階級の利益を偏重して、遂に社会の破綻を招来する資本主義、及び産業の国有官営を理想として動もすれば生産能力を犠牲にする社会主義とは、その範疇を異にする」と資本主義でも社会主義でもない「国家主義」であることを明言しつつ、「重要産業及び金融の国家統制、為替及び貿易の国家管理、新土地法の制定等」「租税制度と社会施設を通じて、国民所得の再吟味、再分配を行ない、以て負担の均衡を図り、以て階級的対立の禍根を除かんとする」と少なくとも現状の資本主義体制の「革新」と格差の解消を訴えている。行政面では「各省大臣に代うるに各省長官を以てし、各省長官は国務院の指揮の下、政治と行政の分界を明白にして、行政の任に当たる」として「国務院創設、内閣制度廃止を主張し、また国民的圧力を組織すべく強力政治団体を結成せん」と内閣そのものの存在を否定

しており、行政権掌握のため金権と醜聞による対立を惹き起こした政党政治に対しての「革新」を示しているのである。[16]

また、国民同盟の党則は史料的限界により不明であるが、党運営の面において「既成政党と異なる点」を打ち出したことは確認される。党大会で決した総裁がその他の役員を指名する総裁中心主義をはじめ、党本部からそれぞれ独立した組織として青年国民同盟および国策研究クラブを設置し、国策研究クラブの調査を政務審査部にて正式決定する方法を執ること（従来の政党では党内に政務調査会が設けられていたが実際上の活用を見なかった）、政民両党の党務部に相当する「組織部」で党の拡大強化その他一切の計画を決すること、党費を公開すること、党員から年額五十銭ずつ拠出せしめること、入党手続は紹介者を要することに加え許可主義をとること、除名処分は査問委員会の決議によること等である。[17] 青年国民同盟は一一月三日、準備会第一回総会を開き、三百余名が参会している。[18] なお、地方支部は少なくとも東京・福岡・滋賀・大阪・京都・奈良・神奈川・群馬に新たに設置された他、[19] 在野法曹団の有志三六〇名は国策研究法曹同盟会を組織し、国民同盟の政策支持を表明した。[20]

それでは、一般世論は国民同盟をどのように見ていたか。『東京朝日新聞』は、結盟にあたって次のように述べている。

> 既成政党には人心既に飽き、飽きたればこそ政党内閣制が一時停止されて居り、無産政党また案外に民心の期待に反した観ある現下の政治けん怠期に際し、何にもせよ若干の新味特色を帯びた交渉団体が議会内に出現した事は其事だけでも歓迎の価値はある。……その成立においては疑ひもなく主として民政党を脱した既成政党的人物が、矢張り既成政党的経過をたどつて新党を創設したと見るの外なきこの国民同盟に限り、如何なる秘けつで独り従来の宿弊から脱し、よく真政党たるの実を挙げ得るであらうか、そこに多大の興味と関心とが繋がる。……

事実において国民同盟をもつとも特色づけるものは、その強力政治を強調する点にある。……吾人はまさか国民同盟が識者の眼には今では下火になつてゐるファツシヨ的思想に、今さら加担するものでない事を信じ、その強調する強力政治が必ずしもファツシヨ的思想なりと断ずるものではない。[21]

既成「政党」に対する不信と倦厭、従来「革新」勢力として期待されながら党勢の拡張に失敗している無産政党への失望が民心を覆う中、両者の折衷ともいえる「革新政党」国民同盟に一定の期待が示されているのである。一方で、既成「政党」に所属していた代議士らが国民同盟を創設したところで「革新」性を発揮することができるのかという疑義と、「革新」色として注目される「強力政治」実現の表明は「ファッショ」的色彩（同社説は「独裁主義的反動思想」と定義）を帯びているのではないかという警戒も同時に抱かれている。「革新政党」という二面性と中庸性を特徴に持った国民同盟は、その二面性と中庸性ゆえに、世論の期待と不安を喚起したのである。また、同日の『読売新聞』は、特に国民同盟の掲げた統制経済政策について、「そのいふ所が著しく観念的、抽象的であつて具体的でないことがその特長を為してゐる、就中列挙されたる諸政策を実行に移すべき方法手段に於て著しく不明瞭である」[22]と評したが、逆に言えば、国民同盟はその政策を観念的・抽象的にすることによってこそ、「革新政党」として発足することができたのである。

以上、本章では、協力内閣運動から国民同盟の結成に至る経緯と、同党に関する基本事項を確認し、その特徴を摑んだ。まず、協力内閣運動の主導者とされる安達と中野は、明治憲法体制内の非議会勢力に対する姿勢の相違から異なる政治行動をとっていたことがわかった。安達は元老や宮中といった政界中枢の理解と協力のもと議会勢力の政権掌握を企図したのに対し、中野は「大正デモクラシー」の延長として、より民意を政治に反映する「議会中心主義」を追求し、官僚など既存勢力との対決を辞さなかった。そして、この両者が中心となって結成した国民同盟は、必然

的に二面性を持つことになった。「革新」的な政綱を明確に掲げた一方で、その構成は従来「政党」政治の担い手であった代議士らによったのである。このことは、世論の既成政党不信を実感した「政党」政治家らが、「革新」色を打ち出すことによって有権者の支持を巻き返そうとしたのと同時に、「革新」の理想を追求する者も、それを実現するためには議会で勢力を拡大させねばならず、衆議院に議席を持つ「政党」政治家を必要としたということを示していると言えよう。

次章では、国民同盟に所属した政治家らの人物像を明らかにすることによって、同党の内情を分析していく。

二　国民同盟の思想・人脈・地盤

㈠　所属政治家の特徴

国民同盟所属政治家の特徴を把握するにあたって、表1の一覧を参照されたい。

まず、彼らの前歴を見ると、私学、弁護士、ジャーナリスト出身の衆議院議員が大半を占めることがわかる。このことからは、藩閥や官界（その供給源は東京帝国大学）、およびそうした権力と妥協しながら党勢を拡大した政友会、さらには憲政会・民政党の幹部に多い官界から政界に転身した政治家らと本質的に異なる勢力であったことが推断されるが、少なくとも、国民同盟はその所属する全員が選挙を通過あるいは経験しており、まずその意味において、いわゆる党人派の代議士が結集した政党であるということが言えよう。

さらに、国民同盟以前以後の経歴より、同党所属政治家は次の四グループに分類することができる。第一は、安達直系と呼ぶべきグループである。安達謙蔵本人の他、安達に師事する熊本県出身者および秘書官経験者など計六名が

表1　国民同盟所属政治家一覧（昭和9年時点）

氏名	年齢	役員	選挙区	初当選	当選回数	前歴
囡安達謙蔵	69	総裁	熊本一区	明治35	12・現	熊本国権党、帝国党、同志会、民政党総務、逓相、内相
囡山道襄一	51	幹事長	広島二区	大正元	8・現	早稲田大卒、韓国統監府嘱託、民政党幹事長
囡井上剛一	65	総務	静岡三区	大正9	4・現	和歌山県師範学校卒、日本弁護士協会名誉理事
囡加藤鯛一	45	総務	愛知三区	大正13	4・現	明治大卒、雑誌記者、憲政会院外団、勘十の兄
園中野正剛	47	総務	福岡一区	大正9	5・現	早稲田大卒、革新倶楽部、民政党遊説部長
囡野田文一郎	61	総務	兵庫一区	大正9	4・現	関西法律学校・明治大卒、判事、神戸弁護士会長
囡古屋慶隆	54	総務	岐阜三区	大正4	6・現	同志社・明治大卒、鉄道参与官、内務政務次官
囡小山谷蔵	57	総務	和歌山二区	明治45	5・現	東京専門学校卒、文部省副参政官、内務参与官
囡小池仁郎	67	総務	北海道五区	大正4	7・現	北海道会議員、北海道水産会長、帝国水産会副会長
圉清瀬一郎	46	総務	兵庫四区	大正9	5・現	京都帝大法科卒、弁護士、国民党、革新倶楽部、革新党
囡菊池良一	54		青森二区	大正4	5・現	京都帝大法科卒、革新倶楽部、民政党
園戸田由美	47	遊説部長	長野三区	大正13	4・現	慶應義塾大卒、信産館製糸取締役、浜口首相秘書官
園田中養達	48	青年部長	滋賀	大正15	3・前	愛知県立医学専門学校・京都帝大卒、民政党遊説部長
園由谷義治	45	組織部長	鳥取	大正13	4・現	早稲田大卒、鳥取市会議員、安達内相秘書官

氏名	年齢	役員	選挙区	初当選	当選回数	前歴
園森峰一	50	会計部長	佐賀二区	昭和3	3・現	天津にて商業、南満州にて貿易・鉱山業に従事
園杉浦武雄	43	政務審査部長	愛知五区	大正13	3・前	東京帝大法科卒、朝鮮総督府判事、拓務参与官
安深水清	63	代議士会長	熊本二区	昭和3	3・現	日本法律学校卒、京城商業会議所副会頭
安伊豆富人	45	幹事	熊本二区	昭和7	1・現	早稲田大卒、九州日日・東京朝日新聞記者、安達逓相秘書官
伊礼肇	40	院内総務	沖縄	昭和3	3・現	京都帝大独法科卒、沖縄県属、民政党沖縄県支部長
園岡野龍一	40	幹事	福岡三区	昭和5	1・前	雑誌『日本及日本人』記者、我観社、日本講演通信社長
中川観秀	57	代議士会副会長	長崎一区	昭和7	1・現	長崎新聞主筆・社長、長崎市・県会議員
園鷲沢与四二	50		長野二区	昭和7	1・現	慶應義塾大卒、時事新報記者・顧問、北京新聞社長
園風見章	47		茨城三区	昭和5	2・現	早稲田大卒、大阪朝日新聞記者、信濃毎日新聞主筆
安野中徹也	40	幹事	埼玉三区	昭和3	3・現	東京帝大法科卒、時事新報記者、安達内相秘書官
栗原彦三郎	54	幹事	栃木二区	昭和3	3・現	早稲田・日本大卒、中外新論社長、東京市会議員
中村継男	45	院内総務	東京六区	昭和3	3・現	熊本県出身、長崎高等商業学校卒、税務懇話会会長
中田正輔	49		長崎二区	昭和7	1・現	早稲田大卒、長崎県会議員、帝国農会議員
佐藤理吉	62	院内幹事	山形二区	昭和7	1・現	東京専門学校卒、最上郡・山形県会議員、同農会長

氏名	年齢	役員	選挙区	初当選	当選回数	前歴
東三浦虎雄	49	幹事	宮崎	昭和3	2・前	京都帝大政経科卒、海軍主計中佐、海軍労組顧問
革鈴木正吾	43	院内幹事	愛知五区	昭和7	1・現	明治大卒、雑誌『大観』編集長、尾崎行雄の盟友
民岸衛	48	幹事	静岡二区	昭和3	3・現	東京外国語学校卒、熱海ホテル経営、静岡県会議員
東渡邊泰邦	42	幹事	北海道三区	昭和5	1・前	早稲田大卒、呉佩孚の参謀、函館区・市会議員
政福田虎亀	49	院内幹事	山梨	昭和7	1・現	熊本県出身、東京帝大独法科卒、山梨県知事
民高橋寿太郎	54	代議士会副会長	岩手二区	昭和5	2・現	海軍少将、第一水雷戦隊司令官海軍軍令部出仕
松谷与二郎	53		東京六区	昭和5	2・現	明治大卒、弁護士、社会大衆党、新日本建設同盟
政山隈康	64		貴族院互選	昭和7	1・現	明治法律学校卒、熊本市会議長、同商工会議所顧問
革大竹貫一	73	顧問	新潟三区	明治27	14・現	対露同志会、国民党、革新党
革関直彦	76	顧問	貴族院勅選	明治23	現	国民党、衆議院副議長、東京府会議員、革新党
佐藤啓	75	顧問	山形一区	大正9	4・現	早稲田大卒、山形日報社長、山形県会議員

〔凡例〕政：安達直系　民：民政党系　東：東方会系　革：革新党系　無印：その他
出典：森岩吉『国民同盟陣営展望』（政界評論社、昭和9年）、『東京朝日新聞』等に基づき筆者作成。

これにあたる（ただし山隈康は貴族院互選議員）。第二は、中野正剛を中心とする東方会系グループである。もとは民政党に所属し、のち昭和一〇年、中野が国民同盟を脱党し東方会を結成すると、以後徐々にこれに続いていく。昭和九年時点の情報をもとに作成した一覧には一一名を記載したが、そのうち第一八回総選挙（昭和七年二月）で当選した者は六名にとどまる。第三は、山道襄一を中心とする民政党系グループである。前章で既述の通り遅れて民政党を脱党し、のち昭和一〇年、民政党に復党する。国民同盟に所属した間、党内最多の一〇名全員が衆議院に議席を有した。第四は清瀬一郎を代表的人物とする革新党系グループである。もとは革新党に所属、国民同盟結成にあたって同党を解消し合流すると、安達直系グループとともに昭和一〇年以降も国民同盟を構成した議員らである。衆議院当選一〇回を数え昭和二年から貴族院勅選議員であった関直彦を含め、計四名である。その他、民政党脱党組であるがその後復党することはなかった七名と、新日本建設同盟から参加した松谷与二郎を加え、昭和七年一二月結盟時の現職衆議院議員数は計三二名であった。

また幹部人事について、一覧からわかるように、幹事長山道の他、八名の総務は中野と清瀬を除く六名が民政党系であった一方、遊説部長や、国民同盟が新奇性を打ち出した青年部長・組織部長・政務審査部長は東方会系の者たちが占めた。後述するように、こうした人事上の特徴は国民同盟にとって大きな意味を持つことになるのだが、ここではその事実を指摘するだけにとどめておく。

本章では、これら四グループのそれぞれについて、議会活動の経歴から窺われる政治思想や人脈、選挙地盤の観点からその傾向を検証し、国民同盟の内実を明らかにする。

㈡　党幹部の思想と人脈

国民同盟における所属政治家の構成を立体的に把握するにあたり、まずは前節で述べた党内四グループの中心人物

の閲歴からその思想や政治姿勢、並びに彼らが国民同盟に結集するのにいかなる接点があったのかを明らかにする。

1　安達謙蔵

安達謙蔵は元治元年肥後藩士の家に生まれ、学生時代は漢学とドイツ学を修めた。[23] 若き日の安達は「壮士」と呼ぶに相応しく、朝鮮にて新聞記者として躍動し、明治二八年には閔妃殺害事件に関与、収監され、予審免訴で無罪となったものの挫折を味わった。[24] 釈放後、熊本国権党常務委員に就任し政界に身を投ずると、明治三五年衆議院議員に初当選する。明治期の安達は、帝国党（その中心勢力としての熊本国権党）・大同倶楽部・中央倶楽部と、いわゆる「吏党」（「非民党」系）に所属し党勢拡大に肝胆を砕いたが、学生時代よりこの時期まで安達に最も影響を及ぼしたのは、当時の代表的保守政治家、佐々友房であった。佐々は「その思想の根底に熱烈なる皇室中心主義と、国家主義の教育思想と、東洋モンロー主義」を有し、薩軍として参加した西南戦争敗北後は熊本にて私塾同心学舎（のち済々黌）と政社紫溟会（のち熊本国権党）、中央政界にて国民協会・帝国党を組織して、井上毅や西郷従道、品川弥二郎らと協働した他、大隈重信外相による条約改正交渉に際しては「頭山満と提携し、……終に改正の中止」に追い込んだ人物である。したがって、「板垣の自由党とも、大隈侯の改進党とも、根本的に相容れざるは当然」で、「国運発展のため二大政党によらざる挙国主義によるべしと信じてその政治的交際は山県〔有朋―引用者注〕氏等官僚系と提携する」ものであった。[25] 安達自身は「政党内閣論者であつて、大政党を作らなければいかぬと政党合同を唱へ」ていた。[26] が、その政治家人生は佐々の遺産によって規定されることとなった。

それは第一に、政治家安達謙蔵のイメージの根幹を形成した。政友会・政友本党系の新聞記者前田蓮山は「安達先生の誤解と云ふものは矢張り帝国党であつたからでせうね、あの頃新聞記者は帝国党と云へば悪い者としてしまつたからね」[27] と述べているし、安達自身も「私に来る手紙にもさう書いてある。お前は元国権党ぢやないか、国権党はフアツショだから――といふやうな事でせうが」[28] と発言しており、「非民党」で出発した安達イメージには国家主義的

色彩がつきまとっていたことが看取される。

第二に、佐々から受け継いだ人脈による藩閥や官僚との提携は、議会勢力の拡大とそれに伴う安達の求心力向上をもたらした。佐々没後の安達が政友会に対抗すべく中央倶楽部を率いて桂新党に合流し、「選挙の神様」として立憲同志会・憲政会・民政党の党勢拡大に寄与、「党人派の総帥」とも称されたことは周知の通りである。そしてその内実は、吏党時代より大浦兼武ら山県系官僚と接触していたことにはじまり[29]、安達がその実権を一任された第二次大隈重信内閣（大浦内相）下の第一二回総選挙では下岡忠治内務次官・江木翼内閣書記官長とよく連絡をとって与党を大勝に導き[30]、その後も内務省の組織的調査能力と人事を活用して選挙を指導するなどしていた[31]。ただし、安達は積極的に警察権力を利用して選挙干渉を行うことには抑制的であったように思われる。むしろ安達は選挙に際し事前の情報収集や候補者調整などの準備に力を入れていたから、選挙戦中は反対党による買収等の選挙違反を防止し自党の作戦を貫徹することが重要であり[32]、したがって選挙そのものについては公平を期していたのではないだろうか。例えば、安達が内相時代に「自己の手に於いて理想的の総選挙を実行[33]」したと述べている第一七回総選挙では、選挙違反の摘発を「政府は最も公平に行って居るのであって、特に注目すべきは、各党各派一様に検挙すべきは検挙してゐる[34]」と評されている。ともかくも、安達は「吏党」出身の代議士であったため、明治期の民党勢力や後の党人派代議士と異なり藩閥・官僚との接点や連携の機会が多く、そうした既存の権力との関係を重視していたはずなのである。前章で述べた協力内閣運動における安達の薩派人脈や穏健な政治姿勢も、この延長線上にあると言えよう。

安達に関して最後に、彼自身「政治的思想の一大変化[35]」が起きたと述べている浜口雄幸内閣の内務大臣時代について言及しておかねばならない。安達は当時「内務大臣として、左傾思想ばかりでなく、一種の右傾思想といふか、また軍人方面にも（思想上の問題が）ある」ことを知った。「斯ういふものの依つて来るところを研究すると、その大部分は議会に於ける議員のこれは我々政党員として自ら責めなければならぬ[36]」と既成政党不信の重大さとその責任を痛

感したと言うが、一方で「革新」的な志向をもつ軍人に対しては、「『陸軍の軍職に在るものがいづれの所、いかなる場合においても、もし政治外交に関する演説をしたやうな場合があつたら、厳重に取締れ』といふ訓令」を「全国の警察官へ秘密裡に通達」した[37]ように、その政治関与に厳しく否定的な態度をとっている。安達はあくまで政党および議会人による「革新」を目指していたことが窺われる。また、安達は内相在任中衛生行政や社会政策に熱心に取り組んでおり[38]、これらの施策は選挙の際に大衆の票を取り込むことも目的としていたであろうことは想像に難くないが、とりわけ尽力した労働組合法案をめぐっては財界との関係を悪化させる結果を招いた。安達が諒解を得ようと交渉した王子製紙社長の藤原銀次郎をはじめ、三井の団琢磨、三菱の木村久寿弥太らが反対運動を起こしたのである[39]。当時内相秘書官を務めていた由谷義治が、「爾来財界と民政党乃至安達先生との間の応援関係、資金関係にどんな影響があつたか、……あまり好い結果ではなかつたろうと思う[40]」と述べているように、民政党内閣以後、国民同盟期の安達は資金調達力も落としていた可能性は高いと言える。

要するに安達は、「吏党」すなわち「非民党」の政治家として、既存の権力と提携しながら政友会に対抗し自派を拡大してきたが、その実績ゆえに憲政会・民政党内の「党人」の支持を集めるという逆説的な人物であった。さらに国権主義者というイメージと現実的利害関係からくる進歩的姿勢とが共存した人物でもあり、この安達総裁なくして国民同盟は「革新政党」たりえなかったのである。しかし、既存権力から離れた安達の政治力低下は免れ得ず、それが国民同盟の党勢にも影響したことは間違いないであろう。

2　中野正剛

中野正剛は明治一九年福岡県士族の家に生まれ、旧藩校の流れを汲む中学修猷館で儒教的教養を身につけると、同三八年早稲田大学予科へ入学、学生時代には頭山満や犬養毅らと接触しアジア大陸への関心を持つとともに、大学の指導教授で民本主義者の浮田和民の影響を受け、同四二年政治経済科を卒業した。『東京朝日新聞』記者となった中

野は、純民党の立場から藩閥・軍閥官僚政治家（山県有朋・桂太郎・寺内正毅など）を徹底的に批判するとともに、辛亥革命に同情するなどアジア主義的傾向を示した。大正期には雑誌『東方時論』に移り選挙権拡張論からやがて普通選挙論を展開、また、ベルサイユ講和会議での官僚外交の敗北を見聞して日本の前途に危機感を抱いたことから「極東モンロウ主義」（極東の排他的独占）を唱えるようになる。[41] 大正九年、衆議院議員に初当選すると、無所属倶楽部・革新倶楽部で「内には普選を基礎とするイギリス型二大政党による政党政治の確立、外には国民外交」による日本の「極東優秀権」確保を掲げたが、第一五回総選挙で革新倶楽部が後退したため、第一党に躍進した憲政会に入党するに至った。[42] これ以後、憲政会・民政党で中野は安達を総帥に担ぐ党人派の中心的存在となるが、やがて「政民両派の対立が激化し、『政党政治の腐敗』がさけばれるなか、政党内閣制論の議会政治論だけを慎重に切り取って擁護」、[43] すなわち議会への民意の忠実な反映とそれを実行する強力な指導力をもった政府の実現を重視するようになる。そしてそれゆえに、政権党である民政党内においては、選挙という民主的プロセスを経ていない官僚派「党外人」が同党の政策、それも産業合理化と国際協調を担っていることを批判し、[44] 危機に際して英国マクドナルド挙国連立内閣をモデルとした協力内閣構想に奔走、それに挫折して既成政党の指導力に絶望すると、現状打破を掲げて躍進していた「革新政党」としてのナチスに傾倒するようになったのである。[45]

そして、先述した国民同盟の「綱領宣言等の作成は中野君に一任となっていた」[46] との証言が複数残っている。もちろん、党の宣言綱領であるから「清瀬一郎、山道襄一等の幹部が協議決定」[47] したが、「革新政党」の「革新」的な側面は中野によって打ち出され、代表されたことは明らかである。

3　山道襄一

山道襄一は明治一五年広島県賀茂郡の郷社十三神社の神主の家に生まれ、村長や県会議員などを務めた父や兄の影響を受けて育ち、同三九年早稲田大学政治経済科を卒業した。大学時代は安部磯雄が当時会長を務めていた雄弁会に

所属していたが、一年先輩の永井柳太郎、二年後輩の中野正剛ら「どちらかといへば進歩的な思想をもつてゐる仲間と同じゼネレーションでありながら、学生時代から国家主義者だつた」。それ以前から「国権党で有名な佐々友房の門にも入つて」おり、「安達謙蔵氏との関係なども佐々先生からの因縁」であるという。『大韓日報』『中国新聞』記者を経て、大正元年衆議院議員に初当選、憲政会・民政党幹事長、文部参与官、鉄道政務次官等を務めた。「彼は技巧的方面に於て決して出色の人物ではない。彼が一面に妥協家である所以はここにある」、その「過去はただ努力の一語で尽きてゐる」と評されたように実務型の政治家であり、尼港事件・済南事件・張作霖爆殺事件を実地視察した他、昭和五年には欧米を漫遊し、「新聞種ではわからない特殊の材料をもつてゐる」とされた。[48] 人脈的・思想的系譜としても、また党務を通じても安達に近かった存在であると言える。

昭和七年に出版されたその著書『日本再建論』からは、古今東西の事情に通じた山道の国家主義的な政治思想を窺い知ることができる。まず「日本の家族制度は働かずと雖も食を給せられ、懈けたりと雖も衣服を与へられ、病む者も不具者も収入の多きも少きも等しく衣食住も給せられる建前で……乏しきを憂へず均しからざるを憂ふるのであり、「即ち大衆の生活保障は日本建国の精神である」と平等思想からなる国体観を述べると、[49] 続いて「日本帝国建国の精神は人道の完成にあり、日本民族生存の意義が此処にある以上は大和民族は世界的に発展せなければならぬ使命を持つて居る。さればわが民族の正しき発展の要求は即ち正義である」と国権伸長論を展開し、[50] とりわけ「日本の犠牲と資本と技術と文化とで築き上げられた賜」である「満洲を中心とした極東モンロー主義」を唱えている。[51] こうした言説は中野にも見られたものであるが、民本主義思想を基調とした中野と異なり、山道は「欧米の文化を採用した日本国民は、大戦後デモクラシーの思想を鵜呑みとし」[52] たとして、わが国の二大政党政治について次のように断じる。

二大政党対立を原則として互に更代して政権に当ると云ふことを憲政常道と心得た結果は、両政党は憲政常道に

依つて一種変態の世襲的政権継承制が確立された如く思惟し、国政に対し何等の努力を払はずとも何時かは我党内閣が出来る、無為にして或時期を待つことが賢明であると考へ始めたから、政党の幹部は選挙に対しても冷淡であれば其勝敗も亦之を意とせず、唯第二党たるの地位を確保すれば足るとなし、党人の質よりも量に重きを置き、政策の樹立遂行にも精励を欠き、結果政党を沈滞昏迷に陥れ、国政を腐敗堕落せしめ、遂に国家の発展を阻害するに至つたのであらうと思はれる。固より私は政党内閣其ものを否認するのではないけれ共、二大政党を原則として叫ばるゝ憲政常道論が如何に憲法政治議会政治を毒しつゝあるかを憂ふるものである。[53]

元老西園寺公望によって慣例化された、政民二大政党が交互に政権を担当する「憲政の常道」は、両党が互いにその政策を切磋琢磨させる健全な議会政治をもたらすのではなく、むしろ世襲制のように機能することで両党の惰性を生じさせ、政治不信を招来したと分析しているのである。昭和七年時点において、安達の復党を拒絶する若槻礼次郎・町田忠治ら民政党幹部に反感を抱いていた山道が、安達らの新党結成に向けた動きを観測するなかで、「憲政の常道」に一石を投じ得る第三党に関心を抱きつつあったことが推察できる。

安達と同様、その政治姿勢から憲政会・民政党の幹部として若槻や江木翼ら党内の元官僚グループの信頼を得ていた山道[54]であるが、その基調にあったのは平等主義的国体観と国権伸長論であり、既成政党に対して「政権争奪に熱中して、国権の伸長と民族の発展に対する熱意を欠き、日本及日本人を無視する欧米の正義と平和に追従した[55]」との不満を腹蔵させていた。既成政党の中で実務家として地歩を固めた山道もまた「革新」的な色彩を有していたのであり、「革新政党」へと参加したことには一定の必然性があったのである。

4　清瀬一郎

清瀬一郎は明治一七年兵庫県飾磨郡の庄屋の家に生まれ、姫路中学、山口高校を経て同四一年京都帝国大学独法科

を首席で卒業、弁護士活動の傍ら特許法の研究にも取り組み、大正二年から同一五年の間、第一次世界大戦の主要当事国であるドイツ・フランス・イギリスに留学した。帰国後、留学の成果となる学位論文を提出するとともに、犬養毅の国民党に所属して政治活動を始め、同九年、衆議院議員に初当選する[56]。清瀬の根本的な主張は「言論の自由」の確保と議会政治の徹底であり[57]、それは治安法制批判と普通選挙要求、既成政党・財界批判として現れた。盛んに展開した主張の中には、「議会制度の真価を発揮せしむるやうにするのには、先づ以て制度上の改革に着目せざるを得ない此考から、……根本に於て大日本帝国憲法第四十二条の改正を要求せざるを得ない[58]」と明治憲法の改正にまで言及しているものもある。外交面では、第一次世界大戦でのドイツの敗北を引き合いに出して帝国主義を否定し軍縮を唱えたが、満洲事変後の世論が大陸進出を支持し始めると、意識的に軍縮論を引っ込めるようになった[59]。

このように清瀬は自由主義・民主主義・法治主義といった近代的諸価値の徹底を追求し、一貫して既成政党や財界を批判した理論型の政治家であったが、清瀬自身が分析しているように、普選の施行による選挙費の増大と議会内最左翼としての無産政党の登場、二大政党政治の慣行による存在意義の低下から、彼が率いる革新党は不振に陥らざるを得なかった[60]。昭和七年の第一八回総選挙では同党の当選者は清瀬と大竹貫一のみとなり、交渉団体として必要な二五議席にも遠く及ばず、議会活動のため他派との提携に迫られた。そこで清瀬が接近したのが、安達グループであった[61]。「安達謙蔵氏は先年我々が選挙革正の審議会設立を提案したときに時の内相として無条件に賛意を評した人であり、中野正剛氏は革新倶楽部創立者のひとりであった[62]」と述べるように、公平な選挙運営を期していた安達とかねてより政界革新の同志であった中野を信頼し、国民同盟に合流したのである。とりわけ、清瀬が重視したのは選挙法に関する認識の一致であり、「今回安達氏一派と提携して国民同盟を組織するに至ったのも、是等の人々が選挙法問題に関し、我々と所見を相同じうせられたが為め、相結んで之を実現しようと考へたからである[63]」と説明している。

党勢が先細る中で「革新」的な主張を展開していた清瀬にとって、既成政党の政治家が自己反省の結果として「革

新政党」を結成したことはまさに渡りに船であった。国民同盟結盟に際し、清瀬は中野に対して「これから一緒になつて大いにやらうぢやないか」と語ったというが[64]、いよいよ「革新」の理想を実現させ得る第三党として躍進を期待していたに違いない。

ここまで論じたように、「大正デモクラシー」の延長として「議会主義」によって担保された国民外交を目指し革新的政策を掲げた中野、党務に精励し実力を涵養しつつも元来の国家主義思想により既成政党への不満を抱いた山道、近代的諸価値に基づく政界革新を唱え既存勢力批判を一貫させながらも議会活動に窮していた清瀬は、国家主義者としての側面と議会勢力拡大の功労者としての側面を併せ持ち、議会人による自己革新の必要性を痛感していた安達のもとに、昭和七年時点においてそれぞれ部分的に思想と利害を重なり合わせながら結集した。その思想や政治姿勢の違いからは、「革新」の理想に突き進む中野・清瀬と、「政党」実務による現実路線を歩んできた安達・山道の姿が浮かび上がる。また、彼らの人脈上の媒介となったのが、佐々友房・頭山満・犬養毅といった明治期の国権・民権運動の指導者であったことも考え合わせると、そうした国権・民権思想は、政党内外の官僚および財界が明治憲法体制下の実権を握った二大政党政治期においてもなお「党人」によって継承され続け、政策面で官僚主体の民政党政権による欧米との協調が行き詰まったとき、「革新政党」という形で再び現出したと言うこともできよう。安達はまさにその象徴的存在であったがゆえに、党人の結節点となり得たのである。

㈢　党内各グループの人脈と地盤

国民同盟内各グループの中心人物たちの思想と人脈に続いて、本節では各グループ内における人脈や地盤状況を明らかにし、それらと各グループの思想傾向や政策志向とに関連があるかを検証していく。それぞれについて掲げる表は、普通選挙施行以後、中選挙区制の下で行われた第一六回（昭和三年・田中義一政友会内閣）、第一七回（昭和五年・浜

表2　安達直系グループの総選挙結果

氏名	第16回		第17回		第18回		第19回	
	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位
安達謙蔵	16,691	4	22,400	3	18,944	4	22,993	1
	熊本二区／民政		熊本二区／民政		熊本一区／中立		熊本一区／国同	
深水清	19,386	1	25,328	1	14,403	5		
	熊本二区／民政		熊本二区／民政		熊本二区／民政			
伊豆富人					15,621	4	15,202	5
					熊本二区／民政		熊本二区／国同	
野中徹也	16,761	2	19,636	1	18,819	1	26,165	1
	埼玉三区／民政		埼玉三区／民政		埼玉三区／民政		埼玉三区／国同	
福田虎亀					15,622	5		
					山梨／民政			
石坂繁							17,026	5
							熊本一区／国同	
蔵原敏捷							16,602	4
							熊本二区／国同	

出典：衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』〈第16–19回〉より筆者作成。

口雄幸民政党内閣）、第一八回（昭和七年・犬養毅政友会内閣）、第一九回（昭和一一年・岡田啓介内閣）総選挙の結果から抜粋したものである。なお、表中の濃色は落選を意味している。

1　安達直系グループ（安達派）

既述のように、安達直系グループの中心は熊本県出身者である。安達との関係を述べれば、深水清は「安達氏を頼つて若くして朝鮮に渡り、生命を賭けて安達氏の事業を助け」たほどの同志、伊豆富人は「子分といふよりは息子と云つた方が適切である位に徹頭徹尾安達氏によつて育て上げられた政治家」である。[65] その他は推定となるが、石坂繁は安達と同門の済々黌卒、福田虎亀・蔵原敏捷は安達の内相時代に内務官僚だった縁からであろう。いずれにせよ、安達が昭和七年の第一八回総選挙において連続当選一二回を数えたように、明治期の熊

本国権党時代より続く安達一派のための組織と地盤が存在した。民政党所属の同県選出議員のうち、政友本党から合流した小橋一太や大麻唯男を除く代議士たちは、安達と行動を共にすることの方が恩恵は大きかったに違いない。[66]

また、東京帝大政治科を卒業後、著書『貨幣本質論』をはじめとする著述業、高千穂高等商業学校講師、時事新報記者を経て安達内相の秘書官に抜擢された野中徹也は、その出身地埼玉県北埼玉郡を含む埼玉三区（定数三）において、初出馬の第一六回総選挙で二位当選、以後は一位当選を続けた。「学生時代から政治の習練を心がけ」、「政治記者として、政界の表裏を縦横にかけまわった」[67]野中は、昭和八年出版の著書で「『組織』無きものは亡ぶ。之からの闘ひは『組織』と『金力』との戦だとも言ひ得る」[68]と断言しているだけに、長年の計画の下、「親戚知己」と「その縁故者」を起点とする確固たる組織の構築と著述業や講師業による資金の確保に成功していたのであろう。しかもその組織構築の重要性については、「古い形の『政治家』の中でも安達謙蔵氏等は夙に『政治』における『組織』の必要を痛感して居る一人だ。氏が『選挙の神様』と謂はれたのも此の為で、体験から近代的意味のオルガニデチォンの必要を達観したオルガナイザーである」[69]と述べているように、安達から学んだものであった。

彼らは安達への師事と自身の政治生命の安定が密接に関係していたからこそ、国民同盟に所属し続けたのである。

2　東方会系グループ（中野派）

中野派・「革新」派とも呼ぶべきこのグループは、「早稲田大学時代からの親友」である中野と風見章を中心に、農村問題・社会問題に関して政策通と言われた当選歴一―三回の若手政治家によって構成され、その多くは演説を得意とした。具体的には、茨城県や長野県の農民運動に深く関係し農民請願運動の指導者となった風見をはじめ、郷里であり選挙区の長野県上伊那地方の蚕糸問題（糸価安定法案等）に熱心に取り組んだ戸田由美、学生時代に社会主義思想に傾倒し産業組合運動（産業組合中央金庫法改正等）や独自の統制経済理論に邁進した由谷義治、「氏が書いた『統制経済論』は国民同盟の経典となつてゐる」という杉浦武雄、民政党時代「名遊説部長の名を冠せられた」田中養達、中

表3　東方会系グループの総選挙結果

	第16回		第17回		第18回		第19回	
氏名	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位
中野正剛	18,761	1	19,380	3	19,557	2	21,686	1
	福岡一区／民政		福岡一区／民政		福岡一区／中立		福岡一区／中立	
戸田由美	14,526	4	18,451	1	12,214	4	5,269	6
	長野三区／民政		長野三区／民政		長野三区／民政		長野三区／国同	
田中養達	14,885	4	20,890	4	8,895	7	14,020	4
	滋賀／民政		滋賀／民政		滋賀／中立		滋賀／国同	
由谷義治			20,131	2	15,447	3	14,233	4
			鳥取／民政		鳥取／中立		鳥取／国同	
森峰一	19,790	1	18,850	2	13,848	3	8,488	5
	佐賀二区／民政		佐賀二区／民政		佐賀二区／民政		佐賀二区／国同	
杉浦武雄	10,251	3	15,366	1	8,756	5	14,028	3
	愛知五区／民政		愛知五区／民政		愛知五区／中立		愛知五区／中立	
岡野龍一			14,766	3	11,056	6	9,179	8
			福岡三区／民政		福岡三区／中立		福岡三区／中立	
鷲沢与四二			15,428	4	13,139	3	8,642	5
			長野二区／民政		長野二区／民政		長野二区／国同	
風見章	11,418	6	28,589	1	15,267	4	31,302	1
	茨城三区／民政		茨城三区／民政		茨城三区／中立		茨城三区／国同	
三浦虎雄	13,431	3	15,820	2	7,059	8	15,556	1
	宮崎／民政		宮崎／民政		宮崎／中立		宮崎／国同	
渡邊泰邦			11,575	3	7,854	4	16,159	2
			北海道三区／民政		北海道三区／民政		北海道三区／中立	
簡牛凡夫			15,809	4	11,939	6	8,573	8
			福岡一区／民政		福岡一区／中立		福岡一区／中立	

出典：衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』〈第16–19回〉より筆者作成。

野が「あんなに話の上手な男はない」と評した鷲沢与四二などである。[70]

中野自身大正期より名の知れた言論人・演説家であり、主宰する雑誌『東方時論』の関係者からの寄付や実業家安川敬一郎からの援助を受けるなどして初当選して以来、「独力で選挙地盤を開拓して」[71]郷里福岡市で連続当選を重ねていたが、中野を「親分」と仰いで共に民政党を脱党した田中・杉浦・岡野龍一・三浦虎雄・簡牛凡夫は既述の通り第一八回総選挙で軒並み落選した他、その後に民政党を脱党し国民同盟所属となった戸田・森・鷲沢も第一九回総選挙では落選の憂き目に遭っている。脱党にあたり、田中は「先輩友人、或は選挙区の有力者からその無謀なることを注告された」といい、森は「安逸の生活を捨てゝ苦闘の生活へ飛込んだ」と評されているように、[72]それ以前の彼らは民政党の組織的援助に依って選挙戦を戦っていたのであろう。しかし、田中は第一九回総選挙で返り咲きを果たしており、国民同盟滋賀支部の設置が一定程度功を奏したことが窺われる。一方、第一八回総選挙で民政党鳥取支部より「最も強硬にして最も真剣な復党勧告が殺到した」由谷は、鳥取立憲青年会という支持母体を持ち「金持のボンチ」と綽名されるほどの資金力を有していたため、[73]その後も当選を重ねることができた。演説等を通じて大衆に働きかける政治手法をとる彼らはその分だけ個性も強く、選挙の当落も個人の力量に依っていたのである。

「革新」の理想に燃えた新進気鋭の若手代議士らは、選挙において「政党」組織の威力を痛感したに違いなく、そうした不満は一層彼らの行動を先鋭化させるきっかけになったとも考えられる。

3　民政党系グループ（山道派）

山道襄一を中心とするこのグループの代議士は、民政党の重要ポストを務めていた者たちも多い。幹事長であった山道をはじめ、議員総会長の井上剛一、院内総務の加藤鯛一、党務部長の野田文一郎、総務の古屋慶隆、内務参与官小山谷蔵、逓信政務次官小池仁郎といった面々である。彼らは中野派のように革新的な思想傾向や政策志向で強く結束していたのではなく、党務を通じて関係を構築していたものと思われる。ただし、党人派代議士として安達に敬服

表4　民政党系グループの総選挙結果

	第16回		第17回		第18回		第19回	
氏名	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位
山道襄一	15,888	2	15,465	1	14,368	3	18,072	3
	広島二区／民政		広島二区／民政		広島二区／民政		広島二区／民政	
井上剛一	18,833	1	25,472	1	13,593	4	12,677	5
	静岡三区／民政		静岡三区／民政		静岡三区／民政		静岡三区／民政	
加藤鯛一	16,498	3	19,961	2	16,995	2	17,089	2
	愛知三区／民政		愛知三区／民政		愛知三区／民政		愛知三区／民政	
野田文一郎	31,076	1	23,434	2	20,495	2	15,788	4
	兵庫一区／民政		兵庫一区／民政		兵庫一区／民政		兵庫一区／民政	
古屋慶隆	14,964	4	26,033	2	無投票当選		20,532	3
	岐阜三区／民政		岐阜三区／民政		岐阜三区／民政		岐阜三区／民政	
小山谷蔵	19,191	1	16,246	1	12,352	3	14,385	2
	和歌山二区／民政		和歌山二区／民政		和歌山二区／民政		和歌山二区／民政	
小池仁郎	9,709	3	12,192	3	11,807	4		
	北海道五区／民政		北海道五区／民政		北海道五区／民政			
菊池良一	7,768	4	19,686	1	11,383	3	9,773	3
	青森二区／民政		青森二区／民政		青森二区／民政		青森二区／民政	
岸衛	18,592	1	15,773	2	13,848	4	9,252	7
	静岡二区／民政		静岡二区／民政		静岡二区／民政		静岡二区／民政	
高橋寿太郎			15,321	3	16,974	4	11,628	4
			岩手一区／民政		岩手二区／民政		岩手一区／民政	

出典：衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』〈第16–19回〉より筆者作成。

していたことは一様であり、それゆえに安達なき民政党が第一八回総選挙で一四六議席しか獲得できず一〇〇議席以上減少させる惨敗を喫したとき、彼らは安達の復党に向けて総裁若槻礼次郎や筆頭総務町田忠治、顧問原夫次郎、同桜内幸雄に直談判を重ねるなど熱心に活動した。[74] しかし、町田をはじめとする党幹部が復党反対の強硬姿勢を貫いたため彼らは脱党、「選挙の神様」安達のもとに参集したのであった。

国民同盟に在籍したのは、それから第一九回総選挙の直前までのことである。「山道その他の人々は従来民政党の地盤に立つて来た」[75]と評されるほどであったため、国民同盟所属候補として既成政党の地盤を覆し当選することは難しいと判断したのであろう。そもそも、「明治十四、五年のころ政論勃興の時代より、養成せし政友会（当時自由党）の地盤なれば、其の勢力を覆没することは元より容易の業ではない」ところ、「同志会創立以来、此の地盤開拓に注意熱心し、従来一人の候補者をも立て得ざりし地方には、特に遊説演説会等を度々開催し、又その地方の有力者を物色、予自ら会見して立候補の準備行為を怠らざるよう指導した」のは安達であって、その安達自身が「爾来十有余年、一度び獲得したる地盤は今尚持続せられ、同志会、憲政会乃至民政党を通じて、牢固たるものあるが如し」と言っているほどである。[76] この安達が築いた地盤に国民同盟は阻まれたのであり、「其の人にあらざる幹部が得意然として、此の上にあぐらをかき居る現状を見れば、相続の資格なき者が不意に大いなる遺産を擁して戸惑える感なきにもあらず」[77]と民政党幹部を難じたところで、既に権力から遠ざかり資金力も落としていた老政治家の安達はもはや「選挙の神様」となり得なかった。安達を頼れず、民政党議員として支持者と関係を構築し当選回数を重ねていた山道らは、民政党に復党する他なかったのである。

なお、菊池良一はかつて中野・清瀬・関直彦・大竹貫一とともに革新倶楽部に所属し、「蔣介石とは無二の親友」で支那通であるなど、思想的には「革新」色が濃かったが、[78] 第一五・一六回総選挙における二度の落選と、第一七・一八回総選挙における民政党候補としての飛躍的な得票の経験から、山道らとともに民政党へ復党していったものと

思われる。

4　革新党系グループ（清瀬派）

二大政党時代の逆風の中でも第三党たる革新党の候補として連続当選を重ねた清瀬一郎と大竹貫一である。清瀬は生家の名声や出身校の姫路中学人脈に加え、農民組合側弁護士として臨んだ小作争議裁判を通じ「清瀬信者」と呼ばれる熱烈な支持者を持っていたとともに、特許法の権威として多くの特許事件訴訟の弁護を担当、企業より顧問弁護士としての固定収入や政治資金を得ていた[79]。明治以来「常に民衆運動の先頭に起つて奮闘し就中普選実現の功労者としては天下普くこれを知る」大竹も、その「選挙区も亦絶対信任で何んの役に就かなくても神様扱ひ」で、政界引退のため「昭和七年に立候補を断念したところ選挙区の熱烈なる懇望もだし難くまたも立候補して当選」した[80]。この二名に加え、尾崎行雄の秘書であった鈴木正吾は、清瀬が革新倶楽部の代議士であった頃より深い関係を持ち、選挙区では青年組織に会場を設営させ「とにかく演説で地盤を築いた」と言うように[81]、選挙を重ねる度に獲得票数を伸ばしていた。

いずれも自力で開拓した強固な地盤を有し、国民同盟の解党に至るまで在籍した代議士らであった。

5　その他

中野らの「革新」グループに属さない民政党脱党組の代議士らが、後に民政党復党と国民同盟残留に分かれたのは、そのどちらに自らの活躍の場を見出したかということであるように思われる。山道グループと異なり、国民同盟に在籍し続ける道を選んだ者たちは、民政党時代に党本部の役職に就くなどしておらず、国民同盟で幹事や院内総務といった役員になっていた。また、長崎新聞主筆・同社長から長崎市会議員・同副議長・同県会議員を務め「地道に歩一歩と少しも無理のない健実な歩みを続けて来た」中川観秀、同じく長崎県会議員を務めたのち初出馬の第一八回総選挙で根拠地佐世保市内の約四割（七、七九五票）の支持を得た中田正輔、税務懇話会会長の経験から税制の専門家とし

表5　革新党系グループの総選挙結果

	第16回		第17回		第18回		第19回	
氏名	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位
清瀬一郎	12,150	4	13,400	3	12,999	4	21,815	1
	兵庫四区／革新		兵庫四区／革新		兵庫四区／革新		兵庫四区／国同	
鈴木正吾	8,842	4	9,277	4	13,993	3	17,204	1
	愛知五区／中立		愛知五区／中立		愛知五区／中立		愛知五区／国同	
大竹貫一	15,413	3	19,989	2	16,829	3	22,550	1
	新潟三区／革新		新潟三区／革新		新潟三区／革新		新潟三区／国同	

出典：衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』〈第16–19回〉より筆者作成。

て「浮動票の多い都会地で毎回引き続き三万票の得票」を有していた中村継男、最上郡会議員・同議長・山形県会議員等を歴任していた佐藤理吉などは、[82] 長年かけて自ら培ってきた地盤に自信を持っていたために国民同盟に残留したのであろうが、第一九回総選挙では不出馬の中川の他、出馬した三名はいずれも落選しており、彼らもまた民政党の組織なくしては当選できなかったことが窺われる。

一方、特別な事情により安達らと行を共にした者たちもいる。沖縄県選出の伊礼肇は、国民同盟参加にあたり支持者に次のような説明をしている。大正一三年、伊礼が沖縄県振興会の一員として同県の疲弊を当時憲政会総務であった安達に陳情したところ、安達は沖縄県救済に関する建議案を提出し黒糖消費税半減・産業助成費・工業助成費・糖業奨励費等の交付を実現したばかりでなく、昭和四年浜口雄幸内閣で内相に就任すると沖縄振興策の策定と振興調査費・土木港湾費の計上に取り組んだ。そのため、「私〔伊礼―引用者注〕の新党参加は安達氏に対する一切の打算を超越したる感激に出発して居る。私が吾が沖縄を最も善く理解し熱愛する安達氏に対する情義を以て脱党理由」とする所以であると。[83] 安達に対する個人的な、しかし沖縄県の特殊事情に基づいた情義によって国民同盟に在籍したことが窺われるのである。他、佐藤啓は父里治が大同倶楽部に所属した縁から安達と交際し、自身の中央政界進出も憲政会総務時代の安達の説得によるもの

表6　その他の総選挙結果

	第16回		第17回		第18回		第19回	
氏名	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位	得票数	順位
伊礼肇	14,732	2	11,320	4	9,162	5	15,318	2
	沖縄／民政		沖縄／民政		沖縄／民政		沖縄／国同	
中川観秀			10,785	7	13,065	5		
			長崎一区／民政		長崎一区／民政			
栗原彦三郎	8,211	4	17,707	2	12,045	4	10,884	6
	栃木二区／民政		栃木二区／民政		栃木二区／民政		栃木二区／国同	
中村継男	30,577	1	29,970	2	33,792	3	19,956	6
	東京六区／民政		東京六区／民政		東京六区／民政		東京六区／国同	
中田正輔					14,236	4	7,415	6
					長崎二区／民政		長崎二区／国同	
佐藤理吉					無投票当選		7,967	5
					山形二区／民政		山形二区／国同	
佐藤啓	16,749	4	19,444	3	14,801	4	16,578	4
	山形一区／民政		山形一区／民政		山形一区／民政		山形一区／国同	
松谷与二郎	12,438	6	25,243	5	19,319	5	7,940	10
	東京六区／日労		東京六区／日大		東京六区／労大		東京六区／勤労	

出典：衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』〈第16–19回〉より筆者作成。

であり、尊皇思想を奉ずる栗原彦三郎には、ともに「普選運動血涙史を彩つた」大竹貫一との人脈もあった。[84]

最後に、松谷与二郎は元無産政党の代議士である。日本労農党、全国大衆党、日本大衆党、全国労農大衆党を経て社会大衆党に参加したが、満洲事変後の満蒙を視察して「資本家と労働者が相対峙して抗争してゐる時ではない」と思い至ったため、社会大衆党を脱党し新日本建設同盟を結成、やがて国民同盟に合流したという。「革新政党」としての性格が、松谷のような無産派にも一定の期待を抱かせたことが窺われる。「国民同盟が種々な形に於て無産大衆と接触して来たのも、その間松谷氏らの努

力が大に力ある」と、党内において大衆運動の取り込みを主導したが[85]、昭和九年四月には国民同盟を脱党し、勤労国民党を結成していく。

二大既成政党に挑むにあたって、大衆に訴える演説や独自の支持層を持つことによって自力で地盤を開拓しようとした「革新」グループと、「選挙の神様」安達謙蔵の選挙戦術にあやかろうとした「政党」人たち。既述の通り党内の多数は後者であったが、彼らが明治以来の政友会、そして安達が切り開いた憲政会・民政党の地盤を覆すことは、国権党以来の伝統がある熊本県以外では至難であったに違いない。既成政党政治家の自己反省は、演説という大衆向けの新たな選挙手法や従来の支持層との訣別を辞さない姿勢によって示されなければならなかったのである。

以上、本章では、「革新政党」たる国民同盟の所属政治家たちが、中野・清瀬系の「革新」グループと安達・山道系の「政党」人とに傾向を分けていたことの内実を明らかにした。単純図式で言えば、前者は「純民党」系の議会内左派、後者は「非民党」の流れを汲む議会内右派ということでもあり、昭和七―一一年という過渡期にこうした様相を呈したことは、近衛新体制へと至る政党合同の嚆矢であったと見ることもできよう。そしてそれゆえに、議会内において第三党として影響力を持ちえた可能性もあったはずである。しかし、従来の議会人のみによるこの最初の小さな試みは、議会人として選挙を通過しなければならなかった以上、当初から分裂する可能性を内包していた。次章では、国民同盟が党内外の要因によって有権者の支持を得られず、挫折していく過程を明らかにしていく。

三　キャスティング・ヴォート掌握の可能性

㈠　「革新」と「政党」の摩擦

「革新政党」国民同盟は、第三党としてどのように振る舞い、いかなる運命を辿ったか。結果から言えば、政界に重きをなすことなく党勢は漸次衰え、昭和一一年に一五名、翌一二年に一一名と議席を減らして昭和一五年に解党に至ったのであるが、民意の既成政治への不信を受けてそれに応える「革新」的な政策を掲げた新党であったにもかかわらず、有権者の支持を得られなかったのはなぜであろうか。本節ではまず、党内要因としての内部対立に着目する。

国民同盟の「革新」的側面を担った中野一派と、「政党」的体質を担った山道一派の摩擦は、まず党運営のあり方において現れた。中野派に属した風見章は、次のような回想を遺している。

> 国民同盟が創設されたとき、何処も同じ役員問題で大分ごだついた……僕〔風見―引用者注〕は平党員で結構ですよ、その代り自分でつくつた党なんだから、幹部会だつてなんだつて自由に出入りしますよと云つてとうとう役員にはならず、その代りどんな秘密な幹部会へでも顔を出したので、山道なんか内心面白くなかつたらしいヨ。だが卑しくも自分は選挙民を代表してゐるんだと云ふ自信を持つてゐたので、最初に当選した民政党時代から幹部会自由出入と云ふ新例をつくつてやつた[86]

第二章第一節で既に指摘したように、幹事長山道の他、総務の八名中六名は民政党系の人物が占めていた。風見の

回想からは、立党の経緯より来る国民同盟は自分たちがつくった党であるという「革新」派の意識と、「政党」としての実務に当たる幹部との間に生じた摩擦の様子が窺われる。また中野らは、結盟にあたって「ひ色の地に八咫鏡と太陽を配置した優勝旗めいた同盟旗と鷲を中央にのさばらした青年同盟旗」の他、「ファッショ・ユニフォーム」を製作し、それを着用させた院外団の青年国民同盟員三百名を三個大隊に分けて結盟式の警備に当たった。これらは中野自身「どうだ！　ムソリニもヒットラーも何かあらん」と発言しているように[87]、ファシスト党やナチ党を模していることは明らかであり、これには総裁安達も次のような反応を示している。

> 結盟式に迄こぎつけた国民同盟、二十二日朝から丸の内の本部に集まる人々、中野、杉浦、加藤、戸田の四代議士は黒のファッショ・ユニフォームに身を固めモーニングや紋付羽織の中に異彩を放つ、午前十一時半頃新総裁に決定してゐる安達謙蔵氏が例の底光りのする眼付でのつそり自動車を乗りつける、……然しオーヴァーを脱ぎ捨てると、こは如何に折角期待の制服姿ではなくたゞのモーニングだ、……加藤鯛一君や中野正剛氏が「とに角総裁がユニフォームをつけんのは変だ、上位だけで結構だから一寸」と頼むと「そんなつまらんものは着られん」と無表情に断つてしまつた[88]

「ファッショ」と誤解されるような「革新」色を忌避している様子が窺われるが、それだけでなく、安達は雑誌記者に「いま擡頭しつゝある国家社会主義とか、ファッシズムとかいふものが、どうお考へですか」と問われた際、「さう、中野君などは人にさう思はれ易い性質を有つて居るやうだが、強ち中野君もファッショ主義でもなからう[89]」と答えるなど、中野による過度の「革新」色を払拭しようと努めていた。既成「政党」的体質からの脱却をしなければ国民の支持は得られないが、明治憲法体制を否定する独裁政治を想起させるほどの「革新」に行き過ぎてもいけな

いという国民同盟の中庸性ゆえの苦悩が見て取れる。

さらに、そうした「革新政党」の苦悩は挙国一致内閣に対する議会態度においても現れた。結盟直前の第六三議会の開会前より、山道一派は是々非々の立場で政府を支持することが妥当であるとの見解を持っていた一方、中野一派は挙国一致内閣打倒を主張していたことが報じられている[90]。結局同議会では、政民両党が時の斎藤内閣に閣僚を供給し与党的立場をとったことから、唯一の野党として少数党の存在感を示そうとするが、そのために議会開会直後より会期延長論を唱えたことなどは「政略的香気が高い」と見られ、「強ひて異見を樹て政府にたて突き、これによつて小なる存在を大きく光らせんとあせり過ぎる国民同盟、……今の時代が要求する政党反省の実がどこにあるかと詰問せざるを得ない」と、その既成政党的体質を断じられることとなった[91]。また、政府予算案に対し、「余りに国民の期待を裏切ること甚だしく政治を解せざる官僚予算である」と批判しながら、「時局柄単に無きに優るの理由の下にやむを得ずこれを承認する」と賛成の立場をとった[92]ことは、国民同盟の苦しい立場を露呈するばかりであった。次の第六四議会では、緊急代議士会で「今後は徒らに他会派との妥協を避け、同盟本来の立場に立ち正々堂々と議会を通じてその主張を国民に徹底せしむること」に意見が一致したと報じられているが[93]、これは民政党系幹部による既成政党と変わらぬような妥協的な議会態度に対し、「革新」的なグループが異議を唱えたと推察することができよう。

なお、この時期より中野は平沼擁立運動に積極的に動き出し[94]、近衛文麿や鈴木貞一、石原莞爾、東久邇宮らに接触、「労働団体を一緒にして何かやらう」という意思表示もしており[95]、実際に逓友同志会統領や八幡製鉄所国民勤労同盟総裁に就任している[96]。一方、中野の平沼擁立運動があまりに公然たるものであったため[97]、山道は「平沼内閣説は……逸早く世間に流布されたので妨害阻止運動が猛烈に行はれてゐるやうだ」と談話を発して牽制した[98]。安達も斎藤内閣期には「挙国一致の趣旨はまことに結構だと思ふけれども、実際はなか〳〵困難であり、また殊に既成政党と一緒にやつて行くことは甚だどうかと思ふ」と斎藤首相に述べるなど[99]、未だ既成政党と一線を画し「革新政党」たらんとす

る姿勢を示したが、やがて岡田内閣期には政府に接近し始め、[100] ついに同内閣が設置した国策審議会の委員に就任するに至った。これには中野が反対し、清瀬が「監視的静観」すなわち反対に近く、山道が賛成したが、[101] 安達としては、その経験からやはり権力に接近しなければ政治的影響力を行使することはできないと判断したのであろう。

そして、安達が内閣審議会委員に就任した昭和一〇年五月以降、総選挙の噂も流れる中で民政党系代議士の復党の動きが活発化する。同年一一月初旬には山道・中野がともに解党論を表明すると、山道は同月二八日に、中野は翌月九日に国民同盟を脱党した。[102] これすなわち、安達が後年次のように回想していることである。

> 内部的な勢力争いがいつとはなしに醸成されたことは、予の最も遺憾とするところであった。即ち、中野正剛と山道襄一である。両人共同志として予の最も信頼する士であり、国民同盟では予を党首として両翼両輪の重きに任ずる立場にあった。これが事毎に相反撥し、その性格意見の相違は始終大小の問題に現われて角逐し、両人の友人子分もそれぞれ二派に分かれて反目するという風で、剰さえ地盤関係なども紛糾錯綜して、遂に収拾がつかなくなり、両人とも相ついで同盟を脱退してしまった。[103]

党運営のあり方や政府・議会に対する態度等、「革新政党」として進むべき道を統一も共有もできなかった国民同盟は、結局のところ「革新」の理想と「政党」としての現実を両立させることができず分裂のやむなきに至り、新聞でも絶えずその摩擦が報じられていたために、有権者の支持を得られるべくもなかったのである。

(二) 社会大衆党との比較

前節で述べた国民同盟の分裂は、総選挙を前に政民二大既成政党の地盤に対して民政党系代議士が抱いた不安が引

鉄となっていた。しかし、その後昭和一一年に行われた第一九回総選挙では、二大政党に対する「第三党」として社会大衆党が躍進、一八議席を獲得して国民同盟の一五議席を上回る結果となった。本節では、国民同盟が有権者の支持を得られなかった外的要因として、社会大衆党の存在に注目する。

社会大衆党は、国民同盟準備委員会の結成と同時期の昭和七年七月に結成された。周知の通り、社会民衆党と全国労農大衆党が合同してできた無産政党であり、委員長に安部磯雄、書記長に麻生久が就任、綱領に「労働者農民一般勤労大衆の生活擁護の為に戦ふ」、「資本主義を打破し無産階級の解放を期す」の二項目を掲げた。国民同盟の綱領が、単に「統制経済を確立し、大衆生活の保障を期す」との文言であったことに比べると、「大衆」の定義が「労働者一般勤労大衆」と具体的であることや、「資本主義の打破」を明確に打ち出していること、そしてなにより、「戦ふ」「打破」といった闘争的な表現が使われていることが目を引く。さらに国民同盟が「ファッショ」と警戒されていたのに対し、社会大衆党は「反ファッショ」の旗印を掲げ、第一一回総選挙の選挙期間中にはその姿勢を明確に打ち出し、安部委員長のメッセージを全国の演説会場で候補者に朗読させるなどした。[104] 有権者からすれば、中庸な政策がわかりづらく、既成政党的性格や国家主義的イメージが払拭されなかった国民同盟よりも、無産政党の流れを汲み大衆の味方として既存の秩序と戦わんとする社会大衆党の方が魅力的に映ったことであろう。

また、第一九回総選挙結果を比較して見ると、国民同盟の地盤が九州をはじめとする地方部であるのに対し、社会大衆党のそれは東京・大阪といった大都市部に集中していることが如実にわかる。このことは、社会大衆党の河上丈太郎が既に前年一〇月の地方選挙の段階で、「無産党は数においては国民同盟と略ぼ同数であるが国盟は熊本県にかたまつてゐて全国的に分布してゐない、この点数は同じでも政治勢力としては違ふのであつて今回の選挙によつて無産党は第三党としての政治的地位を確立し得た」との談話を発しているように、[105] 国民同盟と差異化するための事実として指摘されていたことでもある。第一九回総選挙は一般に最初の粛正選挙とも言われるが、浮動票の多い大都市部

表7　第19回衆議院議員総選挙（昭和11年）結果

凡例：落選

総選挙有効投票数（A）	11,132,480

国民同盟

東京四区	糟谷磯平	新	3,041
東京六区	中村継男	前	19,956
大阪三区	高梨乙松	新	5,938
神奈川一区	湯浅凡平	旧	10,601
兵庫一区	高谷清一郎	新	2,278
兵庫四区	清瀬一郎	前	21,815
長崎二区	中田正輔	前	7,415
新潟二区	高岡大輔	新	13,128
新潟三区	大竹貫一	前	22,550
埼玉三区	野中徹也	前	26,165
群馬二区	林興重	新	4,492
茨城三区	風見章	前	31,302
栃木二区	栗原彦三郎	前	10,884
奈良	北浦圭太郎	旧	7,910
愛知五区	鈴木正吾	前	17,204
滋賀	田中養達	旧	14,020
長野二区	鷲沢与四二	前	8,642
長野三区	戸田由美	前	5,269
宮城一区	長谷川陸郎	旧	4,879
山形一区	佐藤啓	前	16,578
山形二区	佐藤理吉	前	7,967
鳥取	由谷義治	旧	14,233
和歌山一区	小台弥太郎	新	3,669
徳島一区	富永正衛	新	7,493
福岡四区	宮原六三郎	新	1,973
佐賀二区	森峰一	前	8,488
熊本一区	安達謙蔵	前	22,993
熊本一区	石坂繁	新	17,026
熊本二区	蔵原敏捷	新	16,602
熊本二区	伊豆富人	前	15,202
宮崎	三浦虎雄	旧	15,556
沖縄	伊礼肇	前	15,318
総得票数（B）			400,587
得票率（B/A）			3.59%

社会大衆党

東京一区	河野密	新	14,387
東京二区	安部磯雄	前	20,374
東京四区	浅沼稲次郎	新	13,805
東京五区	麻生久	新	32,251
東京六区	鈴木文治	旧	38,543
東京七区	中村高一	新	5,810
京都一区	水谷長三郎	旧	18,442
大坂一区	田万清臣	新	23,498
大坂三区	塚本重蔵	新	11,852
大阪四区	川村保太郎	新	25,521
大阪五区	杉山元治郎	前	33,884
神奈川一区	岡崎憲	新	21,589
神奈川二区	片山哲	旧	19,582
兵庫一区	河上丈太郎	旧	36,880
兵庫三区	河合義一	新	11,400
新潟三区	三宅正一	新	18,025
群馬一区	須永好	新	8,588
栃木一区	石山寅吉	新	8,003
静岡二区	山崎釼二	新	11,177
宮城一区	菊池養之輔	新	9,698
宮城二区	佐々木東吾	新	4,446
秋田二区	川俣清音	新	17,415
広島一区	高橋武夫	新	9,329
高知二区	佐竹晴記	新	19,943
福岡二区	亀井貫一郎	前	34,159
福岡二区	三浦愛二	新	9,987
福岡三区	野口彦一	新	3,596
福岡四区	田原春次	新	8,361
福岡四区	小池四郎	前	8,307
福岡四区	堂本為広	新	3,957
熊本一区	宮村又八	新	4,542
総得票数（C）			507,351
得票率（C/A）			4.56%

出典：衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』〈第19回〉より筆者作成。

で社会大衆党が躍進したにもかかわらず、国民同盟が当選者を出すことができなかったのは、結局国民同盟が大衆に向けた効果的な選挙戦術を展開することができず、地方における候補者個人の従来の地盤に依存する部分が大きかったことを示していよう。その意味でも、やはり国民同盟は既成政党的体質を残した政党だったのである。

そして、そうした既成政党的体質はもはや公然の事実であり、新聞紙上でも国民同盟の動向はしばしば政民二大既成政党と並列して記述され、一方社会大衆党は「無産党」として別記されたばかりか、その躍進は好印象をもって大々的に報道された。国民同盟は既に「革新政党」とすら見られず、その座を社会大衆党に譲ったのである。

以上、本章では、「革新」的な政綱を掲げた「第三党」であったにもかかわらず国民同盟が有権者の支持を得られなかった要因について、党内摩擦と社会大衆党の存在に着目して論じた。過渡期の政治過程において既成政党と革新派の調整機能を果たす可能性のあった国民同盟であるが、その革新性は「ファッショ」の疑いありと警戒され、既成政党的体質が顔を出せば嫌忌されるという状況では、その特徴である二面性や中庸性を発揮すべくもなかった。時代は無産政党たる社会大衆党のような、大衆の味方としてわかりやすく資本主義体制下の既存権力と闘う第三党を要求していたのであり、既成政党から生まれた国民同盟はその要求に応えられる第三党とはみなされなかったのである。

おわりに

国民同盟総裁安達謙蔵は、後年次のように回想している。

わが国民同盟は、結盟式に発表せる三綱領を真向うに翳して独行直往した。第一に……国際正義を検討して屈辱なき恒久平和の基準を定めんとすることは……外務当局の最も嫌忌する所となり、第二統制経済を確立して、大

衆生活の保障を期するということは、大蔵省官僚の反対する所となり、又大衆生活の保障中には、労働者擁護も含まれている所から、……実業家即ち富豪財閥方面の恐怖反対を招く所となり、軍閥方面は強硬外交には賛成なるも、軍閥に引き摺られ、勝手に操縦せらるるは同盟の承服せざる所、この故に結局軍閥からも敬遠される傾向があり、又政界の積弊を打破せんとする我が同盟と、政友、民政両党と意見の間隔あるは当然のことなり、この故に同盟は八方に合同提携の道を塞がれ、ひたすら政界革新の信念だけを固執して、孤高独行約十年間を経過したものである。[106]

この分析の中に、民意や世論の支持という視点が存在しないことは興味深い。近代日本の議会政治を当事者として推し進めてきた安達にとって、政治とは官僚や財界、またあるときは他党と提携しながら進めるものであった。それは彼が「吏党」的・「非民党」的な政治姿勢を終生貫いていたこととともに、政党政治家というプロの職業人であったことをも示していよう。山道襄一などは、実務家の党人派代議士としてその継承者であった。彼らはあくまで、明治憲法体制の枠内、すなわち議会内での勢力拡大と決定権掌握を目指していたのであるが、そうした政治姿勢こそが、既成政党的と世論に批判されるものであった。

一方、民意や世論の支持を背景に政治行動を展開したのが中野正剛や清瀬一郎らであった。とりわけ中野は、明治憲法体制下での議会政治に限界を見出し、より民意を反映する政治システムの実現を模索、やがて大衆の組織化に取り組んだ。昭和八年七月、土佐農民組合を母体として国民同盟高知支部を結成した際には、演説会が「千五百三十六人の聴衆」で溢れ、「流石の安達謙蔵も土佐農組の動員力の強さには驚いていた」という。[107] しかし、中野が掲げた「革新」的な綱領やその政治的パフォーマンスは「ファッショ」の疑いを持たれて糾弾されたため、党としてこれを強く押し出すわけにはいかなかった。

そして、選挙においては政民二大既成政党の地盤と社会大衆党の「革新」派としての正統性に阻まれた。国民同盟は、変革期・過渡期の存在らしく「革新」と「政党」の概念を共存させ、どちらか一方に振れるということをしなかったが、両者を調和させることもできなかった。対立の中で掲げる中庸は理想的ではあっても、結局存在感を発揮できず支持を得られないものなのかもしれない。

(1) 伊藤隆「国民同盟の結成――安達謙蔵」(『新熊本の歴史　八』、熊本日日新聞社、昭和五六年)。
(2) 永井和「東方会の成立」(『史林』第六一巻第四号、昭和五三年)。
(3) 有馬学「反復の構造」(有馬学・三谷博編『近代日本の政治構造』吉川弘文館、平成五年)。
(4) 伊藤隆『大政翼賛会への道　近衛新体制』(講談社学術文庫、平成二七年)、二三頁。
(5) 坂野潤治「「憲政常道」と「協力内閣」」(『近代日本の外交と政治』研文出版、昭和六〇年)。
(6) 小山俊樹「『協力内閣』構想と元老西園寺公望」(『史林』第八四巻第六号、平成一三年)。
(7) 井上敬介「中野正剛と党外人」『立憲民政党と政党改良――戦前二大政党制の崩壊』(北海道大学出版会、平成二五年)。
(8) 「政民協力」内閣運動そのものに対する宇垣の不関与については、前掲井上氏が政友会久原房之助の証言によって実証している。
(9) 「連立内閣反対者は愛国者に非ず　昨夕安達内相言明」『東京朝日新聞』昭和六年一一月二四日朝刊。
(10) 前掲小山、一五〇頁。昭和六年一一月末はチチハル占領問題において陸軍中央の関東軍に対する統制が成功した時期である。また、その後の政変は政友会久原の転換が発端の久原―富田覚書による若槻の自滅であると小山氏は述べる。確かに、久原は安達とは接触していないと発言している(原田熊雄述『西園寺公と政局　第二巻』〔岩波書店、昭和二五年〕、一五一頁)し、安達自身「最後の時はあれは我輩ではない、富田君がやつた」と言っている(「安達さんに心境を訊く座談会」〔『文藝春秋』昭和七年二月号〕、四九頁)。
(11) 前掲『西園寺公と政局　第二巻』、一五〇―一五一頁。

(12) 前掲井上、六一頁。
(13) 前掲『西園寺公と政局　第二巻』、一二七頁。
(14) 前掲有馬に加え、以下『東京朝日新聞』記事等にて補足。「十氏の脱党　正式承認」（昭和六年一二月一五日夕刊）、「離党届提出」（昭和七年〔以下同〕六月二四日夕刊）、「伊豆、深水両氏　自発的に離党」（六月二五日夕刊）、「加藤鯛一氏　けふ脱党」（六月二八日夕刊）、「民政党脱党者けふ更に二名」（六月二九日夕刊）、「民政党更に四氏脱党」（七月二日夕刊）、「井上後藤両代議士民政脱党」（七月一四日夕刊）、「また一名民政離党」（七月一五日朝刊）、「革新党解消　国策研究クラブ参加のため」（七月二六日夕刊）、「党員四千名参集し総裁に安達氏推戴　国盟けふ結盟式挙行」（一二月二三日朝刊）。
(15) 安達謙蔵『安達謙蔵自叙伝』（新樹社、昭和三五年）、二七八―二七九頁。
(16) 同右、二八〇―二九三頁。
(17) 「新味を見せた国盟の党規　きのふ総会で決定」『東京朝日新聞』昭和七年九月一四日朝刊。
(18) 「青年国民同盟準備会総会」『東京朝日新聞』昭和七年一一月四日朝刊。
(19) 以下『東京朝日新聞』記事。「国盟が東京支部設置」（昭和七年九月一三日朝刊）、「国盟福岡支部　きのふ発会式」（同年一〇月一一日朝刊）、「国民同盟の質疑要綱　総務会で決定」（昭和八年一月一〇日朝刊）、「国盟滋賀支部大会」（同前）、「階級対立の禍根一掃　国盟大阪支部けふ結成され」（同年一月一七日夕刊）。
(20) 「国策研究法曹同盟会生る」『東京朝日新聞』昭和七年九月二一日朝刊。
(21) 「国民同盟の結盟」『東京朝日新聞』昭和七年一二月二三日朝刊。
(22) 国民同盟の統制経済政策　具体的方法の明示を求む」『読売新聞』昭和七年一二月二三日朝刊。
(23) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、一五―一六、二二頁。
(24) 同右「第十章　広島監獄の思い出」ほか、安達謙蔵「予が広島獄中生活の一挿話」（『文藝春秋』昭和八年七月号）、三五―三六頁など。青年期の安達を特徴づけるエピソードとして、後年機会あるごとに回想している。
(25) 佐々克堂先生遺稿刊行会編『克堂佐々先生遺稿』（大空社、昭和六三年〔改造社、昭和一一年〕）所収、宇野東風「佐々友房小伝」、六頁、安達謙蔵「佐々先生の全貌」、一二、二〇頁。
(26) 「安達謙蔵氏と選挙を語るの会」（『政界往来』第三巻第四号、昭和七年四月）、五九頁。

(27) 同右、五八頁。前田蓮山は『東京毎日新聞』を経て『時事新報』の政治記者として原敬首相（当時）と親交を深めた。
(28) 前掲「安達さんに心境を訊く座談会」、六〇頁。
(29) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、八八、九五―九六頁。明治四三年、中央倶楽部結成を統率したのも第二次桂内閣の農商相だった大浦である。
(30) 同右、一四〇、一四二頁。なお、この第一二回総選挙大勝への安達の貢献を評して、徳富蘇峰が「選挙の神様」という綽名をつけたという。
(31) 第一次若槻内閣下における内務省警保局資料「改正法ニ依ル第一回総選挙予想調査」（『復刻版　昭和初期政党政治関係資料　第一巻』〔不二出版、昭和六三年〕所収）が存在するほか、浜口内閣の内相就任時には同門の済々黌を卒業した内務官僚大塚惟精を警保局長に据えて第一七回総選挙を指揮している。
(32) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、九八―九九頁、一一九―一二二頁。
(33) 同右、二三五頁。
(34) 司法省調査課「選挙犯罪の研究」（『司法研究』第一九輯報告書集八、昭和一〇年）、五四一頁。
(35) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、二六二頁。
(36) 前掲「安達さんに心境を訊く座談会」、四七頁。
(37) 前掲『西園寺公と政局』第二巻、三五、三八頁。
(38) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、二五〇―二五三頁。
(39) 同右、二五四頁。
(40) 由谷義治『由谷義治自伝　上巻』（由谷義治自伝刊行会、昭和三四年）、二三七頁。
(41) 木坂順一郎「中野正剛論㈠」（『龍谷法学』第三巻第二号、昭和四六年）。
(42) 木坂順一郎「中野正剛論㈡」（『龍谷法学』第六巻第一号、昭和四八年）。
(43) 住友陽文「大正デモクラシー期「議会主義」の隘路」（『日本史研究』第四二四号、平成九年）。
(44) 前掲井上「中野正剛と党外人」。
(45) 室潔「中野正剛のナチス観」（『学術研究（地理学・歴史学・社会科学編）』第四一号、平成六年）。
(46) 『大石大自伝　春風秋雨八十年』（大石大自伝刊行会、昭和三九年）、二四一―二四二頁。なお、大石大はもと政友

会・政友本党所属の代議士であったが、政友会高知県支部と対立し昭和三年同党より除名、その後落選を重ねるも土佐農民組合総組合長として高知県における農民運動を指導した。昭和七年、代議士時代より懇意であった中野正剛を通じて国策研究倶楽部に加入したが、国民同盟にはその綱領に「失望」したため参加しなかった。しかし中野より度々入党を要請されたため、翌年土佐農民組合を動員して国民同盟高知支部結成に助力、昭和一一年の第一九回総選挙で土佐農組より立候補し当選すると、その後は国民同盟・東方会と共同歩調をとった。

(47) 前掲『由谷義治自伝』、三一八頁。

(48) 安須春十「今を時めく大民政党新幹事長山道襄一君」（『実業之日本』第三四巻第一〇号、昭和六年）。

(49) 山道襄一『日本再建論』（千倉書房、昭和七年）、七頁。

(50) 同右、九頁。

(51) 同右、一二―一四頁。

(52) 同右、一頁。

(53) 同右、一六八頁。昭和七年六月一三日の若槻礼次郎民政党総裁との会見における発言。

(54) 同右、江木と連携して浜口総裁後継問題を処理したり（七五頁）、若槻に幹事長就任を懇請されたり（七七頁）している。

(55) 同右、一一頁。

(56) 黒澤良『清瀬一郎――ある法曹政治家の生涯』（駿河台出版社、平成六年）。

(57) 清瀬一郎「あくまで言論自由の為めに闘はん」（『中央公論』大正九年八月号）。

(58) 清瀬一郎「議会無力の原因の一つ」（『法律春秋』第四巻第七号、昭和四年）、六八頁。清瀬は「我国の議会は行政監督や、政治問責については無力」であると述べ、その原因を「議会の会期があまりに短かい」ことに求めている。よって、議会の会期を定めた大日本帝国憲法四二条「帝国議会ハ三箇月ヲ以テ会期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ」の改正を主張したのである。

(59) 前掲黒澤、七〇頁。

(60) 清瀬一郎『革新倶楽部十年の回顧』（自費出版、昭和七年）。前掲黒澤「第二部　資料篇」に所収されているものを使用した。同書一九七―一九八頁。また、革新党の候補者が従前より強固な地盤を有していても、二大政党政治下におい

ては当選が非常に困難になったことを示した第一六回総選挙の事例研究として、玉井清「第一六回総選挙における政党合同の影響について――革新倶楽部系候補者の動向を中心に」（『法学研究』第八五巻第三号、慶應義塾大学法学研究会、平成二四年）がある。

(61) 前掲黒澤、七六頁。

(62) 前掲『革新倶楽部十年の回顧』、前掲黒澤、一九八頁。

(63) 清瀬一郎「政治の革新と選挙公営」（『帝国教育』昭和七年九月）。

(64) 前掲『国民同盟陣営展望』、七八頁。

(65) 同右、九九、一〇〇頁。

(66) 現に熊本一区（定数五）において、第一八回総選挙で大麻唯男は最下位当選、小橋は落選している。第一九回総選挙でも大麻は四位当選であるし、熊本二区に擁立された民政党新人候補は落選している（小橋は不出馬）。

(67) 同右、一二一頁。

(68) 野中徹也『政治家を志す人のために』（昭和八年、現人社）、二一九頁。

(69) 同右、同頁。

(70) 前掲『国民同盟陣営展望』、八二―八三、八七、九六―九七、一一三、一一八―一一九頁。および前掲『由谷義治自伝』。

(71) 浅尾勝弥『政界人は乱れ飛ぶ』（勝美閣、昭和七年）、一八一頁。

(72) 前掲『国民同盟陣営展望』、八七、九三頁。

(73) 前掲『由谷義治自伝』、三〇八頁。

(74) 「民政少壮派の安達氏復党運動　幹部は相当難色」『東京朝日新聞』昭和七年六月八日朝刊ほか同新聞記事。前掲『日本再建論』一三三―一七七頁に詳しい。

(75) 前掲『政界人は乱れ飛ぶ』、一八一頁。

(76) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、二三七頁。

(77) 同右。

(78) 前掲『国民同盟陣営展望』、八〇―八一頁。

(79) 前掲黒澤、一五、一七頁。
(80) 前掲『国民同盟陣営展望』、一五七頁、前掲『政界人は乱れ飛ぶ』、一八五頁。
(81) 内政史研究会『鈴木正吾氏談話速記録』、七八―八一頁。
(82) 前掲『国民同盟陣営展望』、一一〇、一二七、一三〇、一三二頁。
(83) 伊礼肇『私は何故に民政党を脱党し国民同盟に参加したか』（非売品、昭和七年九月）、二〇―二六頁。
(84) 前掲『国民同盟陣営展望』、一二五、一六〇、一六二頁。
(85) 同右、一五五頁。
(86) 「風見章言行録　昭和一四年」（風見章著／北河賢三、望月雅士、鬼嶋淳編『風見章日記』みすず書房、平成二〇年）、七九―八〇頁。
(87) 「金廿二円也の黒色の制服　あすの結党式を前にして」『東京朝日新聞』昭和七年一二月二二日夕刊。
(88) 「地味な新総裁　制服を忌避　晴やかな結盟前奏曲」『東京朝日新聞』昭和七年一二月二三日夕刊。
(89) 前掲「安達さんに心境を訊く座談会」、六〇頁。
(90) 「現内閣支持派と打倒派の対立　国民同盟の二潮流」『東京朝日新聞』昭和七年八月一五日朝刊。
(91) 「議会の会期延長問題」『東京朝日新聞』昭和七年八月二四日朝刊。
(92) 「やむを得ず警告付で賛成　国民同盟声明を発す」『東京朝日新聞』昭和七年九月一日夕刊。
(93) 「徒らに他派と妥協せぬ　国盟代議士会」『東京朝日新聞』昭和八年二月二八日朝刊。
(94) この時期の平沼擁立運動については、萩原淳『平沼騏一郎と近代日本――官僚の国家主義と太平洋戦争への道』（京都大学学術出版会、平成二八年）、一八一―一八四頁に詳しい。自らの明確な政治基盤を持たなかった平沼が、幅広い勢力から支持を獲得しようとロンドン条約反対派の陸海軍上層部や牧野伸顕の他、陸軍中堅層や国民同盟などに積極的なアピールを行ったと論じられている。中野は平沼が近衛文麿や鈴木貞一と接触する際の仲介役として動いていた。
(95) 原田熊雄述『西園寺公と政局　第三巻』（岩波書店、昭和二六年）、四、一六五、二一〇頁。
(96) 前掲有馬、二九九頁。
(97) 「国民同盟　平沼擁立を頻りに画策　中野氏等暗躍を続く」『東京朝日新聞』昭和八年二月一二日朝刊。
(98) 「政変来は必然　国盟　山道襄一氏」『東京朝日新聞』昭和八年三月一三日朝刊。

(99) 前掲『西園寺公と政局　第三巻』、一三四―一三五頁。
(100) 原田熊雄述『西園寺公と政局　第四巻』（岩波書店、昭和二六年）、四八、八三頁。
(101) 前掲黒澤、七九頁。
(102) 以下『東京朝日新聞』記事。「国民同盟動揺す　古屋氏等の復党問題を繞り　入り乱れた党内事情」（昭和一〇年〔以下同〕五月三〇日朝刊）、「国民同盟の解党遂に不可避の勢　山道、中野両氏も賛成」（一一月二日朝刊）、「山道氏も遂に国盟を去る　一両日中に民政へ復帰」（一一月二九日朝刊）、「中野正剛氏脱党」（一二月一〇日朝刊）。
(103) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、三三二頁。
(104) 「社大党　ファッショ排撃　無産陣営意気込む」『東京朝日新聞』昭和一一年一月二二日朝刊、「ファッショ排撃！新議会政治建設へ　安部社大党首国民に呼びかく」同二月九日朝刊。
(105) 「無産地位確立　大衆党　河上氏談」『東京朝日新聞』昭和一〇年一〇月一七日朝刊。
(106) 前掲『安達謙蔵自叙伝』、三三一頁。
(107) 前掲『大石大自伝』、二五二―二五三頁。

松枝　大貴（まつえ　だいき）
所　　属　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程二年
専攻領域　近代日本政治史